

保安強化へ「Super X」導入

泉金物産 業務精度を向上

泉金物産(本社・盛岡市、八重樫義一郎社長)は、業務システムをカナデンブレイン(本社・東京、吉田仁社長)のLPG統合情報ネットワークシステム「Super X」に切り替え、点検調査業務にハンディターミナルを導入した。これで保安情報の入力省力化できたと見え、データベースシステムの特徴を生かして膨大な情報の中から必要なものを自在に抽出できるようになり、保安管理業務の精度を高めた。



八重樫義一郎社長

同社は業務システムを2011年秋に更新する計画だったが、3月に東日本大震災が発生し、津波で山田営業所(岩手県山田町)を失うなど大きな被害を受けた。これが影響して丸1年遅れ、12年秋に導入した。

Super Xは、LPGガス販売事業に必要な販売、配送、容器、保安、顧客などの情報を管理する基本システムと、必要に応じて追加できる各種オプションシステムで構成される。カナデンブレインはそれを導入する事業者個々の事情に合わせてカスタマイズして提供する。

システム導入の機会は、事業者にとっては、それまでの業務を見直し、合理的で効率

的な業務手順に組み替える機会になる。このため泉金で行い、販売店の委託も受け物産では導入に先立って各支店営業所の社員からそれまで店営業所の社員からそれまでの業務手順、それをどう変えたいかなどをヒアリングし、フル活用している。

データ抽出・加工しやすく

現場での点検調査業務は、決まった地区を数日間、繰り返し訪問して実施する。そこが終わると別の地区という具合に地区ごとに進めていく。ハンディターミナルのメモリーには、その時に入る地区の消費者全戸の前の点検調査結果を入れる。現場では点検先の消費者の情報を画面に呼び出し、内容を更新する要領で結果を入力していく。

現場情報を即時転送 事務所での入力不要

システムは12年秋に導入したが、ハンディターミナルシステムは1年後の13年秋に導入した。支店・営業所7カ所のうち内陸の4カ所は法定点検調査を地域事業者でつくる保安センターに委託してい



導入したハンディターミナルは計24台。現場担当者のほとんどが持ち、集金・検針など保安以外の現場業務にも利用している

漏れもゼロになり、ペーパーレスにもなった」と野崎さん。点検調査業務に関する野崎さんの業務は、コンピューターの画面で調査員の現場での入力ミスや漏れをチェックするだけになった。

ハンディターミナル導入時に心配なのは、調査員が使いこなせるようになるまでの移行期間だ。同社では半年間、現場では従来通り用紙に記入し、会社に戻ってからその用紙を見ながら調査員がハンディターミナルに結果を入力、その後でコンピューター

にデータに移した。手書きとハンディターミナルの両方で並行して行い、5月に完全移行した。調査員は今、現場でスムーズにハンディターミナルを使いこなしている。

期限管理スムーズに 機器提案を下支え

Super Xの最大の特徴は、データベースシステムであること。このため、蓄積したデータの中から、さまざまな条件を組み合わせて抽出したり、並べ替えたりと加工が容易。「以前のシステムは、

絶対のチャンス。Super Xを活用して営業を強化したい」と意気込む。

保安高度化に挑戦 システムを有効活用

八重樫社長は「LPGガス事業で最も大切なことは顧客との信頼関係。信頼関係はガスを安心して使ってもらい、その結果育まれるもの。このため保安は当社の経営の根幹だ」と強調する。

同社は岩手県所管の販売事業者だが、保安機関の認定行政庁は関東東北産業保安監督部。広域事業者から保安業務の委託申請があり、保安機関の認定行政庁を具から監督部に変更することを求められたとき、「保安レベルを上げるいい機会になる」(八重樫社長)と判断、要請を受け入

「大型調整器の交換期限が一時期に集中するケースも事前に分かるので、計画的に分散できる。設備の改善計画も立てやすくなった。ぼんやりとしか見えなかったものがくっきりし、保安の現状がよく見えるようになった。こういうものがあればいいなと思っていったものが手に入った」

営業にも活用できる。宮古支店では経年給湯器の設置先リストを作り、集合住宅に提案したところ4棟で交換に成功した。「営業マンは『こういうデータがあるから』と提案する根拠が明確になり、自信を持って営業できるようになった」

震災から3年が経過し、宮古地区では復興需要が続いている。同支店でも新築や増築に関する業務が増えていく。菅原さんは「今はガス設し、確実に保安を実行する体制を整えたい」